

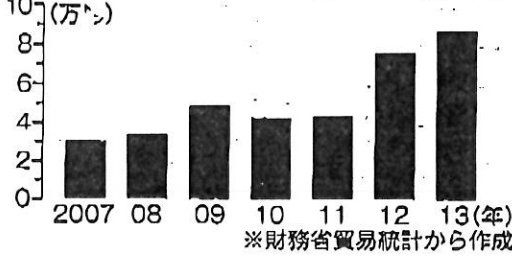
11/14 朝刊 北海道新聞

鉛再利用 道内で精錬を

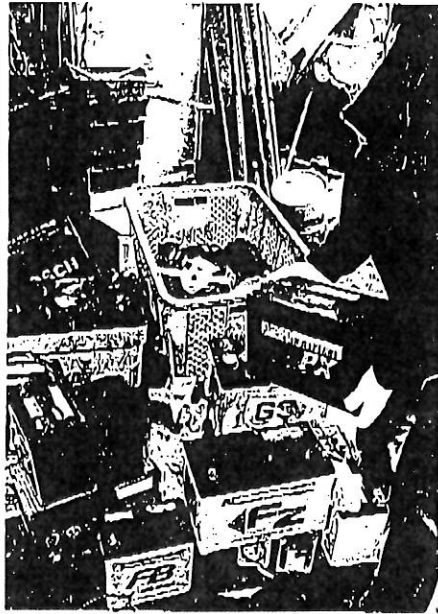
小樽の業者ら工場誘致開始

廃バッテリー流出防ぐ

全国の廃バッテリーの韓国への輸出量



【小樽】再利用可能な鉛を多く含む自動車の廃バッ



「鉛資源地内循環プロジェクト」に参加する大森産業が回収した廃バッテリー

テリーの海外への輸出が急増している。ほとんどが韓国向けで、財務省によると、道内から韓国への輸出量は2008年の約2500トから、13年には4倍近い約9500トにまで増えた。

鉛資源の海外流出を防ぐと、小樽市の廃棄物業者など4社が、道内には無い鉛精錬工場の誘致を目指すプロジェクトを11月上旬に発足、対策に動き始めた。

乗用車のバッテリーは1個約1㎡で、鉛は500gを占める。効率よく鉛を取り出してバッテリーなどに再利用できるため、メーカーなどが国内でのリサイクルに力を入れてきた。

しかし、韓国で大規模な精錬施設が導入されたことなどから、全国的に韓国への輸出が増えた。14年の輸出価格も1㎡平均93円と、07年の2倍に高騰している。一方で、業界によると国内の価格は高くて1㎡70円程度と低迷し、ある精錬業者は「国内でまとまった量を確保するのは難しい

と、経営は厳しい」と嘆く。道内では11月上旬、廃棄物処理業「大森産業」（小樽）など4社が「鉛資源地内循環プロジェクト」を立ち上げ、精錬大手の「東邦亜鉛」（東京）の福島県内の工場に、道内で集めた廃バッテリーを持ち込む契約を結んだ。東邦亜鉛は「月4000㎡の廃バッテリーが築まれば新工場の稼働が可能」と試算する。目標量の回収が軌道に乗れば工場を道内に誘致し、雇用の増加にもつなげたい考えだ。

道内4社の連携を仲介した東邦亜鉛のグループ会社「IDE」（同）の高橋誠治顧問は「韓国の企業ほど高値で買えないが、資源維持や環境面での安全性を理解してもらい、取扱量を増やしたい」と話している。